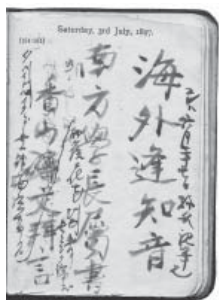
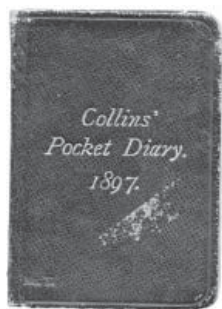


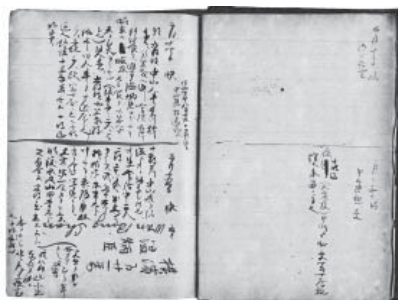
自筆資料に見る南方熊楠…………… 17

日記

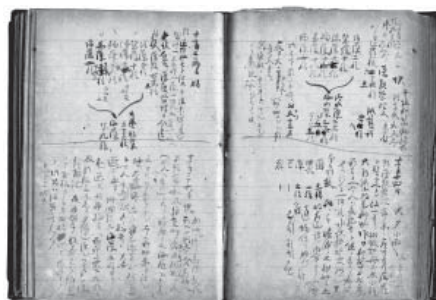
文／岩崎 仁（京都工芸繊維大学准教授）



1. 明治30年日記(表紙・部分)南方熊楠記念館蔵



2. 明治34年日記(部分)顕彰館蔵

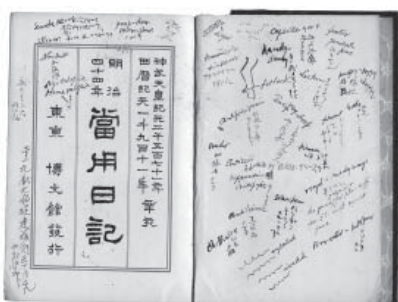


本誌42号表紙では、南方20歳の明治20(1887)年までの日記について紹介した。今回はそれ以降を紹介する。

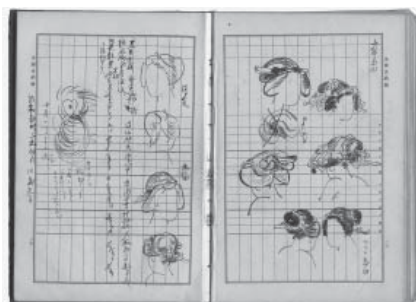
明治19(1886)年末から米国に滞在した南方は、キューバへ立ち寄ったあと明治25(1892)年に渡英する。この間は前回紹介した印刷局発行「懐中日記」を主に使っており、日本から送ってもらっていたと思われる。しかし、英国に渡ってから帰国する明治33(1900)年まではCollins Diaryを多用している。写真1は、1897年の「Collins Pocket Diary」である。この年に南方は孫文と出会い、また大英博物館殴打事件を起こしている。7月3日の部分には孫文自書の有名な「海外逢知音」を見ることができる。

米英留学から帰国後、明治34(1901)年から明治37(1904)年は写真2のような横罫のノートを日記として使っている。見開き2ページで4日分を書き込んでおり、日付も自分で記入している。左は1901年2月12日から15日分で「中山樵」あるいは「中山氏」とあるのが孫文のことで、南方との再会を期して孫文が訪れた際の様子が記されている。13日には孫文からの状を受け取ったこと、14日には「朝九時中山人車に乗り独り来る」と書かれている。なお「温炳臣」は通事すなわち通訳である。この年の10月に南方は那智へ移動し、日本での本格的な植物調査をスタートさせる。この那智時代の3年間はほぼ毎日のように採集した植物の集計を日記に書きこんでいる。写真2右は11月23日から26日の分であるが、珪藻二種、碧藻十種、緑藻十七種…のように藻類を詳細に分類した数が書かれ、那智にわたって当初は藻類の採取に熱心であったことが伺える。翌、明治35(1902)年1月に勝浦から市野々へ移動して以降は、「熊野産無花植物、四百六十九種」という表記となり、その内容も「変形菌一種、菌百十五種、地衣百十三種、藻百六十九種…」と、藻類中心の調査から植物悉皆調査へ変化したことが日記の記述からもわかる。

明治37年10月に那智から中辺路を経由して田辺へ移動し、この地に南方は定住するが、明治38(1905)年以後、没する昭和16(1941)年までの37年間、一部を除いて「博文館当用日記」



3. 明治44年日記(部分)顕彰館蔵



が使用される。写真3の左は明治44(1911)年日記冒頭の見出し部、右は末部の金銭出納録である。見出し部余白には英単語の覚書が書き込まれ、金銭出納録には女性の髻のスケッチが画かれている。このように南方の日記の「日記以外の部分」には南方を知るうえで興味深い情報が散見されるが、このような記載の翻刻は未着手である。

CONTENTS

第25回南方熊楠賞 受賞式	…2
南方熊楠賞受賞記念講演 井上勲	…3
南方熊楠特別賞受賞記念講演 萩原博光	…9
第29回 熊楠をもっと知ろう！講演会 演 岸宏一、池田宏	…15
第29回 熊楠をもっと知ろう！講演会 大和茂之、安田忠典	…19
第30回 熊楠をもっと知ろう！座談会	…28
第31回 熊楠をもっと知ろう！講演会 乾仁志	…39
第31回 熊楠をもっと知ろう！講演会 川染龍哉、小田龍哉	…44
第31回 熊楠をもっと知ろう！講演会 唐澤太輔、神田英昭	…49
南方熊楠研究会 第1回年次例会報告 田村義也	…54
「熊楠」生物覚え書② 土永知子	…56
熊楠メモランダム《10》 岩崎仁	…57
南方熊楠蔵書 渡来系動物和古書について 郷間秀夫	…59
書簡の杜(十三) 岸本昌也	…60
海辺のクマガス 第7回 安田忠典	…62
南方熊楠と同級生たち 郷間秀夫、杉山和也	…64
書評・書籍紹介 神田英昭・唐澤太輔	…68